

大学紛争と私の回顧

磯村 英一

I 私と東洋大学の縁

1 縁のはじまり

2 私にとって大学紛争とは

3 大衆団交に慣れる

4 学長は大学の虚像か

5 大学紛争と市民の反応

6 紛争の中の人間形成

II 大学紛争は教える

1 大学紛争で学んだこと

2 教室は大学の一部

3 “タテ看”は交流の場

III 私立大学の生命とは

1 私立大学の建学の精神

2 校歌に生きる精神

3 “今週の社会学”

4 “これが講義”かの“抗議”

IV 思い出のなから

1 社会学研究所

2 “橋本聖子”との縁

3 神宮球場の胴上げ

V “桐の木は残った”

1 大学のシンボル

2 発祥の地 “白山”

3 学祖井上先生の墓碑

4 学祖の墓碑の再建

5 “もやいの碑”の建設

VI 私は“名誉校友”

I 私と東洋大学の縁

1 縁のはじまり

卒直にいつて百年史の編纂室から原稿を求められたときは嬉しかった。なぜならば、私の人生で、東洋大学時代ほど、毎日を真剣に送ったことはない。戦争時代などと比較出来ないくらい真剣な毎日だった。

しかし大学を去つてすでに七年、その間に東洋大学は百年の「祭典」も迎えた。今から考えてみると、私は人生の半分になる四十年間は何等かの形で東洋大学との関係のなかで過し、その間の十年近くは、大学の学長という「帽子」として、しかも紛争のなかで過した。形の上では歴史のある大学の全責任を負つての毎日だったが、結果は何等の「成果」なくしての退陣となった。そのためかどうか判らないが、自分でも不思議に思うくらい大いに愛着をもっている。

私は大学を去つて名誉教授という称号を受けたが、それ以上に大事にしているのは「名誉校友」である。しかしその面を通じてのつながりは、個人的な関係は別として必ずしも濃いとはいえない。なぜ私を「校友」として扱ってくれないのか、というのが私の不満の一つである。

東洋大学に大島豊という理事長がいた。学生時代からの友人、東洋大の危機を救つたのは「自分」だとよく私に語った。そして大学の教授になるなら東洋に來いといっていた。そんな縁で戦中・戦後、ライター（二部）で

の手伝いをする。しかし決定的に私を東洋に呼んだのは、理事長をつとめた千葉雄次郎教授と、故人となった社会学部創設の功労者米林富男教授、そしてたまたま私が都立大学で、学生委員長として大学紛争に関係した当時の都立大学総長矢野禾積が都立大学退職後、東洋大学の学長となって、大学にくることを誘われる。以上の三者の説得で、東洋大学の正規の教授となるのが自然の運命のように、白山の丘で勉強をつづけることになる。

事実、この間の東洋大学の裏面史の方が、私にとっては重要な回顧となるのだが、今回の原稿の要請は「学長時代」となっている。もし親友だった前記の米林教授が存命だったら、大島と共に三人が苦勞したことを書いていうかも知れない。それは百年史にとって、否二十一世紀の東洋大学にとって、極めて重要な資料となるからである。しかしそれは他日のこととして、主として大学紛争時代のことについて筆を進めることにする。

2 私にとって大学紛争とは

以上のような経緯で東洋大学に「教授」という肩書きで講壇に立ったのは昭和四十二年四月。その頃はすでに大学紛争は各地に発生し、東京大学に近接する東洋大学も例外ではなかった。つぎつぎに学長は辞任し、学長代行が続くなか、突然の選挙で、あつという間に私が当選してしまう。今でも思い出す。現2号館の地下教室で夜の講義を終えての帰り途に、友人の教授から学長候補になっているというのを初めて聞いたくらいである。

昭和四十四年六月十日に最初の学長の辞令を受ける。当時、大学は学生に占拠され、バリケードがつくられていたもので、近接する古びた旅館「梅光」——今は立派なビル——の一室で受けた。その場から学生に囲まれてい

る大学の措置の指揮をとらねばならなかったのが実情である。

その頃は日本の経済成長のなかで、国は大都市のなかの大学や工場を地方に分散させる方針をとっていた。文京区白山で、創立八十周年を迎えて校舎を拡充した以後の東洋大に対し、文部省は増築を認めない。だから近県に拡張の候補地を探さなければならなかった。東洋大学は川越に工学部のあることから朝霞に土地を求めてあつたが、それは市街化調整地域であり、誘水地でもあつて校舎が建てられない。文部省には移転可能を前提として定員の増加の許可を得ていることから、急速に校舎をつくらねばならない。しかし調整地域ではどうにもならない。文部省に行く度に校地の拡張が催促される。このようなジレンマに加えて、当時の学生サークルの分派闘争がからみ、何回か期末試験を延期したり、中止して苦闘が続く。

大学ではよく「自治」という言葉を使うが、それは「教授会自治」が基本である。東洋大学のように、六つもの学部があると、学部長会議は連絡調整の機関でしかなく、決議機関ではない。極端なことをいえば、一学部の教授会が反対すれば、全学の統一した意志としては表現はできない。それは国連の大国がもつ「拒否権」に似ている。

他方教授会は、それぞれ学生を控えている。たとえ「学長の方針」だなどといっても、多くは「学生の主張」に理解をもつたような結果になることが多い。

私立大学は、理事長が経営権をもっているから、学長は学生・学部教授会・理事会の間にはさまれて、身動きができない。いわんや私のように、東洋大学の出身でもない者にとつては、まさに「孤立無援」。しかし大学紛

争のことが新聞に載ると、必ず大学の名の下にはカッコ付きで「学長磯村英一」の名が出る。友人に会うと、また騒いでいるのかと聞かれるのが辛かった。

しかもこの頃大学を吹き荒れていた紛争はまさにある意味では「武装闘争」だった。学生達は「ヘルメットとゲバ棒」。このゲバ棒の先には、時には大釘がついているものさえあった。しかも学内の混乱については、警察は「大学自治」を逆手にとつて、余程の暴力行為がない限り機動隊の出動などの要請を受け入れない。万一それが実現すると、学生からも警察からも大学の自治の「放棄」だという理屈で責められる。

同じ頃、近くにある国立の東京大学で安田講堂を中心とする大学と学生との攻防があつた。それはテレビやラジオまで報道されたが、近接する東洋大学にもそれに近い状態が続いたが、マスコミは「コップの中の争い」として何も報道しなかつた。ただ、周辺住民から騒ぎに対して連日苦情がつづいただけだった。

この苦情は、大学のある白山地区だけではない。学生セクトの一部は、私に面会を強要して、目黒の自宅まで押しかけ、遅い帰宅まで家の周辺にたむろして待っている。近所の人々が異様に感じたことはいうまでもない。家族はしばらく親戚の家に「疎開」する始末。時には居坐つて夜を徹したこともある。もちろん交通機関はなくなつて、しまいにタクシー代を渡して帰つてもらつたことも何回かある。

大学には正規の授業日数があり、それ以下になつたときは文部省から進学・卒業が認められない。それは当然入学試験の中止にまでつながる。私立大学にとつて、入学試験を行わないことは致命的である。新聞に紛争が表われると文部省から連絡がくる。当然私が説明に行く。時には係の役人から「今日ですか」と皮肉られて、悔

しかつたことが忘れられない。

3 大衆団交に慣れる

私は講義中に何回となく学生に囲まれ、校庭に引き出され、大衆団交の場に据えられた。その長時間の記録は、約十時間。午前十時四十分が始まった教室に学生が侵入し、校庭での団交が続き、最後は私の応答がなくなつたことがある。ポリウームの強い電気マイクを、耳の傍らでがなり続けられて耳が聞こえなくなり、目も霞んでしまつて最後は意識の混濁。ついに担架で運ばれて、意識を回復したのは、医務室だった。測つた血圧は二百をずっと超えたあとで知らされた。

このような大学紛争の「後遺症」は、聞こえなくなつた左の耳の回復が十分でなかつたことである。これだけでは今でも残念に思う。受け入れようとしても、全学生の同意を得るなどは、事実上出来なかつたなかでの出来事である。数百人の学生に囲まれ、たつた一人で応待するという状態のなかでは精神が正常に働かなくなる。その上に身体を「こづき回される」こともある。何回かこぶして横腹を突かれた。異常の累積は、時には生命の危機を感じることもさえあつた。そして「いったいこれで大学はよいのか」という強い反省もある。そればかりかたえ私がケガしたりしても、大学紛争は終わらないだろうという絶望感である。これは今から考えても辛かつた。同時に頭に浮かぶのは、日本にとって「大学紛争」とは何であつたのかという疑問である。

いささか愚痴になるが、大学の理事者と教職員は、このような「危機」と見られる状態のなかで、必ずしも一

体となりえない。理事会は、学生が紛争を起こすのは、教授——学長の責任だという。乱闘のあと、器物や教室の破壊があると、学長はその責任をどう考えるかと理事会で「糾弾」される。しかし考えてみると私立の場合にはあたりまえかもしれない。国公立の大学の場合、学長は同じように暴力の標的になり器物を壊されても、その破壊の責任は必ずしも問われない。

東京大学の安田講堂の修繕には、億を超える経費がかかったと伝えられる。しかし、その修繕費は文部省が出す。結局は国民の税金の負担となる。私立大学となると、そのような損害の場合、一応学長が責任を問われる。戦後の歴史のなかで、華やかに展開された大学紛争は今も跡かたもない。ある人は、大学紛争は「熱病」のようなもの。熱が引けば治ると割り切っていた。しかし、学長としての約十年のすべてがそれに集約された経験からすると、単なる熱病で片付けることはできない。

「弱き者」の象徴として、その当時さらし者になった多くの学長達はすでにこの世を去っているか、沈黙を守っている。教育臨調などが新しくその賢さを誇ろうとしているが、何を語ろうとするのか。大学紛争の体験のなかからの意見は、二十一世紀に向かつての日本の大学のあり方に無縁であつてよいのか。

4 学長は大学の虚像か

苦しかった十年にまたがる学長生活のなかにも、いくつかのパフォーマンスがあつた。

第一に、大衆団交を要求し、糾弾闘争を繰り返すなかで、教室で直接講義を聴いている学生と、学部学科の関

係で、全く話したこともない学生とはその対応が異なる。これは人間関係をテーマとする社会学の貴重な経験だと思つた。団交のなかで、私を詰問する者に姓名を名乗らせる。名乗らない者には私は絶対応答しない。私は「姓名」は人間の人格の最後を表わすと信じ且つ教室でも説いているからである。名乗らない者の発言は「無責任」だと思ふ。姓名を名乗り、教室で知っている学生の応待は一般と異なる。

第二は、団交のなかに、女子学生がリーダーとして参加しているときの男子学生の糾弾は、はげしい。これも社会学のテーマかもしれない。それは、男子学生は、女子学生の前では格好いい姿を見せようとする本能が働くからだと思ふ。したがつて、女子学生の参加している時の団交の「きびしさ」には、若干割引いて対応したこともある。

第三は、もし団交のなかに、他大学の学生が加わっているときは、身体への抵抗はもちろん、器物の破壊等まだが、はげしいという事実である。たとえ敵愾心に燃えているにしても、自分が学んでいる大学の環境となると親近感に似たものがどこかに潜んでいるのではないか。それが同じ暴力の行使であつても若干影響するところに集団行動の面白い研究テーマがある。

第四に、学生と警察官とは、いかなる場合においても「水と油」である。学生にとって警察は、あらゆる権力の象徴と映る。「警察」という言葉だけでも、混乱のなかでは刺激の材料となる。逆をいえば警察と「大衆」の関係と、警察と「学生」——それは身分が判っている人間の意味——の関係では、対応・関係が異なるということも研究テーマである。

5 大学紛争と市民の反応

大学紛争が続いた昭和四十年代に、それに似た大衆紛争が、私が研究の対象にしているスラムやドヤ（宿の隠語）街にも起こった。とくに大学に比較的近い東京都台東区の「山谷地区」に起こった騒ぎのときには、早速駆けつけて、大衆のなかで動きを観察した。

あるとき、山谷地区の騒ぎで交番に向かつて投石を続けている一人に、「どうしてそんなことをするんだ」と聞いたら、「学生だつてやつてるじゃないか、テレビに映つてるよ」と言われて返す言葉がなかった。もちろんその本人は、私が大学の教授であることなどは知らないでの発言である。

同じような事件が、大阪の西成区釜ヶ崎で起こったことがある。東京の山谷と共に、日雇・自由労働者のドヤ地区として知られている。このときも、東京から急遽大阪に行つて状況を観察した。驚いたことに、そこでも同じ質問に対して同じような趣旨の返事が返ってきた。「大学の傍らを通つたら学生が石を投げていた。学生だつてやつている」と。

大学紛争のなかで感じたのは、大学という社会が、「学問・自由・神聖」などという言葉にかくれて、大学が社会の一部を形成していることを忘れていないかということである。この特権意識がある限り、その紛争は熱病のようなものとも見られる。ここで平成元年に発生した北京の天安門広場の学生の「暴動」とはどのようになちがうかという重要な研究課題がある。

6 紛争の中の人間形成

昭和五十七年七月、すでに東洋大学で三期の学長を務めた。誰も立候補しないというので、もうしばらくと一部の先生に奨められて立候補の届出をした。投票日の直前になって、一人の学部長が立候補した。大学紛争中は随分お互いに苦勞した学部教授である。もし彼が初めから立候補するならば、私はやらなかったであろう。結果は三十票足らずで私の落選だった。そのときは残念などというよりも、なぜ紛争のなかでの「友情」が話し合いにならなかったのかというくやしきである。

私は以上のようなこの間の大学の顛末に、現在でも「不満の念」を隠さない。それには三つの理由がある。

第一は、私の学長在職中は全期間大学紛争にあけくれた。その理由の大半は、大学がそれまでとった政策の後始末をさせられたことにある。買った土地が、実は校舎など建てられない土地だったのである。その善後措置に懸命になり、校舎の建築許可、調整地域の転用のために、埼玉県庁の渡り廊下をどれだけ歩いたであろう。結局なんとか校舎をつくり、文部省へも一応の説明がつくようにした。「県庁の長い廊下」などというとか書きたくなるテーマのようだが、これを実現しなければ大学はどうなると真剣だったことが今でも頭に浮かぶ。

第二は、大学に「ロマン」が必要だということである。十年間の紛争は、私にそれを考える余裕を与えなかったが、たとえきびしい毎日の連続のなかでも、それを持たなくては「学長」とはいえない。大学は建物ではない。

「精神」であるという反省である。

東洋大学は、学祖井上円了先生が、「哲学館」の名において創立している。ここでいう哲学とは、理論としての学問ではない。大学が社会に何を果たすかという目標である。学祖は「哲学館大学」をあえて「東洋」と改めた。彼の遺稿をみると、世界という視野のなかで、東洋が、そしてその東洋に日本が果たすべき役割を求めている。そのような精神が果たして今の大学の中で生きているのかどうか。そのような建学の精神は、どこかに燃えつづける必要がある。

第三に、学祖は必ずしも大学の役割を具体的に現わしていない。その時代なりの大学をつくった。したがって、そのあとの「建学」は大学を継ぐ教員・職員・学生が創造し、構築すべきだと考える。それがなければ、これらの大学などは「コンピューター・システム」の開発のなかにその枠が集約され、一人ひとりの教授の創造性や人間関係などは無視されることになる。その傾向はすでに一般社会にスタートしている。しかし日本の大学はその危機に直面していることをあまり自覚してない。東洋は三年前に、創立百年の齢を超えた。が改めて何を「創造」しようとするのか、私の気掛りである。

II 大学紛争は教える

1 大学紛争で学んだこと

再度いうようだが、私の東洋大学での生活、その大半は「大学紛争」だったが、そこで経験したことは、大学

を去つて、始めて貴重な経験だつたと思ひ出される。学長などという座にあると、その座が冷静な判断を狂わせることが多い。

第一に、日本の大学は、どのような紛争があつても、それが一般社会とかかわり合いがない限り——すなわち、キャンパス内の出来事——いわゆる「紛争」などという言葉に値しないということである。

キャンパスを離れて、南軽井沢にまで展開されたような事件になれば別である。いいかえれば、学内での「学生対教授」の関係は、大学生活では何か通じるものがあり、それが「闘争」などと呼ばれても、実態は必ずしもそうではないということである。

これは別の面からすると、日本の大学は国家権力に対しては、かなりつよく「独自」の立場を守ることが出来る。警察は、たとえ学長等の要請があつても、いわゆる「機動隊」などを差し向けるものではない。仮にそのような要請をしたとしても「学生の指導が出来ないのか」と逆襲されると、大学は返事のしようがない。何回かそのような態度に接すると、こちらも「学の独立」を守ることが真剣に身に着いてくる。

それに反して、大学の近所からの苦情に対しては、頭を下げる以外にない。結局いたずらをした子供に親があらまるといふような気持になる。おかしいではないかといわれるかも知れないが、そこが学生と教師という関係か、単なる「学問をする」場の付き合いだけではないという——あるいはこれが日本的だという批判を受けるかも知れないが——「仲間意識」が湧いてくる。

激しい紛争のなかでは、警察に捕らえられるものも出てくる。結局は前に述べたような気持から「貰い下げ」

に行く。警察の方では「告発」を待つて検事局に送る手筈を定めている。それが逆になるのだから大学は相手にしないという「自己撞着」に陥る。

2 教室は大学の一部

そんななかで、大衆団交がつづく、ほんとうに神経どころか身体まで疲れ切る。そんななかで、たまたま団交の学生のなかに、教室で教えている学生を発見したときは、百万の味方を持ったようになる。目と目が合った瞬間に、何か通じるものがある。

あるとき長い団交——私の最長の記録は十時間、朝十時の講義から連れ出されて、夜八時に「解放」された——の途中、何回か生理的な処理はしなければならぬ。必ず学生がついてくる。たまたま同じ教室の学生に出会った。「先生もう少し我慢して下さい」という言葉、これ程くらい「嬉しく」聞こえたことはない。

これはあとで考えたのであるが、もしその大衆団交のなかに、他大学の学生がいたら、決してそんな「会話」は出て来ないだろうということである。善かれ悪しかれ、大学という一つの集団のなかで生活をしている。たまたま立場がちがっても、日本流にいえば「同じ釜の飯」を食べている。理屈ではどのように対立しても、日常の人間関係は必ずしも消えないという証拠ではないかと思う。

そんな縁につながった。学長をやめてからも、紛争中のリーダーだった学生と今日でも付き合いをしている。中には一人のリーダーは、闘争中に女子学生と親しくなり、どうしても一緒にになりたい。しかし親が紛争中の男

子の学生の行動からして許さない。何とか説得して欲しいという「二人」の願いを入れて、女子学生の親元まで「説得」に出かけることになる。そのあげくに、「媒介」の役割まで受け持つことになる。何かフィクションのように思ふかも知れないが事実である。すでに三人の子供の親である。これに似た話しはいくつかある。

私は、入学式に当たって新入生に向かって語りつづけてきた。それは「入学したら、大学のキャンパスには必ず来い。教室は大学のすべてではない。しかし大学の構内はそのすべてである」と。いいかえれば、大学は必ずしも学問をすることがすべてではない。そのなかで人間として成長することである。それは大学での人間関係によつてつくられるということである。

3 「タテ看」は交流の場

私は学長として登校するときに、必ず白山キャンパスの中庭を中心に練り広げられる「タテ看」を見て学長室に入る。紛争が激しくなるとタテ看も多くなる。終いにはあまりに多くなつて、置き場がなくなる。警備員にそれを始末させると、翌日は必ず新しいものが現われる。それを若干ノートして整理すると、その日の学生の動きが判る。

そんななかで考えたのは、タテ看は、学生のデモの代替のようなもの、大学側はそれに圧倒されるだけである。教員の大多数はそれを見向きもしない。その状態は、平易に言えば、学生と教員——実際は大学当局、それは学長で代表される——との意志の疎通を欠くことになる。そこで反省した。大学は何等かの方法で、全学生に意志

を表明すべきである。それがあつてこそ、「コミュニケーション」という言葉も生きてくる。

そこで、はじめて『学報』を出すことにした。その誕生が、警察の側から言うところの当然のことだが、学生の示唆もあつたとすると当局には奇妙に映るかも知れないが。

紛争中に大学が「自衛手段」として取つた措置に「ロック・アウト」——大学閉鎖——がある。警察は大学が安易に大学閉鎖をすることを適当としない。器物の破壊とか、交通の妨害にでもならない限り、警察は、そのロック・アウトに協力しない。しかもその理由を、出来るだけ大きく広く「公示」することが要求される。

これもあとで考えついたことだが、警察は大学紛争には、出来るだけ介入しないという方針があつたと思う。それは正しい方針であるように見られるが、一方では、一般国民の大学紛争に対する警察の介入に批判的であることへの配慮からの態度でもあつたと受け取られる。「公示」の要求は、警察の介入の合理性を一般の人びとに納得させる手段でもあつたからである。

以上のような状況を一九九〇年代になって振り返って見ると、その後アジアの諸国、韓国（光州事件）、中国（天安門事件）などが、学生運動が即大衆運動にまで発展している。そのことと比較すると、今更ながら日本の学生運動はいつたいどういふものであつたのか、その社会的基盤にどのようなちがひがあるのかという、理論的検討がなされて然るべきだと思ふ。

日本の学界が、「ペレストロイカ」（立て直す）といった外国語に魅せられて、自分の国の学問の基盤のなかに発生した事件を、まるで忘れたかのような状態にある。そのうちに経済繁栄のなかでも、いつ大学が再び紛争の

るつぼとなるか判らないのである。今日でも見かける大学構内の「タテ看」に、もう少し関心をもつたらというのが私の経験からくる実感である。

III 私立大学の生命とは

わが国の大学は、国公私に分かれる。明治維新の日本の改革のあと、新しい国造りのなかで、「帝国大学」が、地方に分散配属されたことは、国の文化水準を高めるだけでなく、地方の文化の振興にも役立った。その後私人から法人による大学の設置がすすみ、それなりの成果をあげたといえる。しかし大学の設置は文部省による「設置規準」があり、構造的には日本の大学は一定の標準が保たれた。ただその後の経過からみると公私の間に当然ながら若干のちがいが出てきていることは否定できない。

1 私立大学の建学の精神

「建学の精神」という言葉は、私の学長時代など、教室でさえも口にしなかった。学祖井上円了先生のおく書いた「護国愛理」などという言葉も同じだった。しかし、学園に平和がもどってきて様変わりとなる。

近頃よく「アイデンティティ」などという言葉がいわれる。自立とか個性、型にはまった生活、それは教育についても同じである。中学や高等学校に行きたがらない性格は、世の中が様変わりして、平凡な生活には適応しなくなくなる。塾などで、入学試験のために、同じようなつめ込み勉強をさせられたあと、大学までそのような訓

練はまつ平となる。せめて個性のある学習を望むようになって、私立大学のあり方が問われるようになる。

東洋大学は、一時期には卒業生に多数の教員を出したこともあって、「私立の高等師範」等といわれた時代もあるが、いつの間にか「日東駒専」などいわれるようになる。早慶などの私立大学に次いで、特徴のある私大の系列下に入ったことになる。

自由社会の人間形成は、義務教育は別としても、個性の成長は、その学習のなかに何等かのロマンがあつて、はじめて可能となる。それは何等かの形で建学の精神につながるのが望ましい。

東洋大学は、他の私立大学と同じように大学紛争の修羅場を経験したなかで、いつのまにか、「創造のロマン」を失ってしまう。大学といえば、「タテ看」と「バリケード」と「ヘルメット」。それは一時期の大学生を象徴した「角帽」の変形のようになつてしまつては大学の自滅以外にない。

このような大学の個性喪失は、その当事者であつた、私自身に責任のあることが今更ながら、回想され、慙愧の念に耐えない。

去つてから五年目に、大学は「百年祭」を迎えたが、そのときなどは、建学精神の再検討をする絶好の機会だつたのではないかと思う。

2 校歌に生きる精神

私は、音痴ではないが、歌が好きである。大学の混声合唱団からは今でも案内がくる。合唱は、人間が集団生

活の団結を誇る一つの方法と考える。だから私自身「アジアの魂再びここに……」という校歌を完全に歌うことが出来る。それだけではない、野球が好きで神宮に行く。相手チームの校歌まで覚えてしまう。野球に弱い東大の校歌が「唯一つ……」に始まり、六大学全部を歌うのだから、これだけはほめられてもよいと思う。

学長時代、毎年何人もの新任の教授の任命の席で、私は最後に付け加える。東洋大学の教員としての辞令を受けたからには、是非「校歌」を覚え、ときには学生と肩を組んで応援歌を歌って欲しい。それなくしての教育の効果はありえないとまで極論する。

今でも、今の研究室から帰るとき、家近くなつて、いつのまにか「霊峰遠く望みつ……」を口ずさんでいる。

3 “今週の社会学”

私の大学での幸せは、学長時代を通じて、講義を担当することを許されたことである。教員にとって、教室は“絶対の場所”と考える。ここで絶対などというのは、生意気のように聞こえるかも知れないが、私にとっては、真剣の場であった。学生との大衆団交は、肉体的にはきびしいものがあり、長時間の団交のなかで、強烈な電気マイクの音響を受けて左の耳が一時間こえなくなつた。その後遺症は今日でもつづいているが、お蔭様で、少しぐらい悪口をいわれても、通じなくなつてゐる。

教室の講義が、“生命”であるということは、講義の内容によつて、学生の聴講の態度がちがってくるからである。そこで講義は、同じテーマが与えられても、毎学年同じ内容とはしない。必ず大半は、その構成・内容を

変えた。その理由は、

第一に、同じ講義をすることは、社会科学については、進歩のないことを意味する。専門は社会学、それだけでも当然「変動」は理論的にもありうる。いわんや「都市社会学」は、対象となる都市現象は、四六時中でも変化は当然のことである。したがって、絶対に近いほど同じ内容の講義はしなかった。それは聴講する学生にも判る。二年同じ科目を聴講した学生があつたので、単位は済んだのではないかと聞いたら、内容が違うからつづけて聴いた、単位が目的ではない、といわれて嬉しかったことが忘れられない。

第二に、単位がいらぬといえ、ある学年の試験答案に、「私は単位はいりません。東大の学生ですから。「盗聴」一年間有難うございました」と書いてあつた。私は東大でも時間講師として出向いていたが、内容は東洋の方が上だと書いてあつた。しかも三人も同じような学生がいたのである。

学年、単位、学科、演習等々の枠のなかで、しかも大学という機構にかこまれ、教室という空間で時間を過す。それが学校という制度である限り、必ずしも抵抗するつもりはない。しかし、十年近い大学生活が、ほとんど紛争に明けられていたのをかえりみると、学生の反応のなかには、単なるイデオロギーだけではなく、大学の機能・構造・運営のなかに反省すべきものがあるのではないか。それはキャンパスの構造にもかかわるもののように思われた。

第三に、以上のような反省は、私の講義に一つの型を生むことになる。それは講義のテーマの前に、その週間にあつたイベントのいくつかをとりあげ、「今週の社会学」というサブ・テーマで語りつづけた。これは学生の関

心を高めることに成功する。前項に書いた東大の三人の学生も、この「前座の社会学」ともいうべき講義の内容にひかれたのかも知れない。

しかし話す方にとっては、かなりの努力が必要である。社会事象の現実には学生自体も知っている。それを社会学の分野にどのようにあてはめて解説し、さらに理論的な分析をするかを追求するのである。

この習慣は、私が大学を去ってから、若干評論的なものを書くのにも大きく役立つことになる。

4 「これが講義」かの「抗議」

教室が大学の生命であることは、すでに触れているが、大学紛争のなかで、大衆団交の「余波」ともいえる「教室査察」を実行させられたのは、思い出してもいちばん辛いことであった。

学生との団交も、何回も続くと、いつのまにか親近感をもつようになる。きびしさのなかに、少しでも大学を良くする熱意を感じることもある。

同じ学科の学生がリーダーだったとき、団交のあと、是非ある教授の講義を「見て欲しい」という。講義は聴くものではないかと言うと、聴く前に見て欲しいとのこと、三百人位のクラスだった。最後の列に坐ったが、たしかに、講義は全く聞えない。それでもよく学生がいるので、わけを聞くと、この教授「ある日突然」に出席をとることがある。それに欠けると、試験の結果に重大な影響があるから我慢している。しかし、「これが大学の講義といえるか」を問われたとき、私は黙っていられたかった。

いくら学長といつても、個々の教員の講義の内容に口を出すことは許されないことは知っている。しかし、講義は学生の耳に伝わってこそ効果がある。それが出来なくては、大学は責任を果していないといわれても返す言葉はない。意を決してそのあと教授を学長室に招いて学生からの要請を話し、マイクのボリュームを上げて、全体に聴えるように話した。

実は私がこのような行動をしたのは、たった一回であつたが、やがてその教授は大学を去つたからいつそう印象が深い。しかしこれには、前話がある。

私は東洋大学に来る前に、東京都立大学にいたが、その間に一年間の海外研究を利用して、ボストン大学で専門の都市社会学の講義をやつた。そのときその大学の学長が講師の辞令を渡したが、付け加えて、「講義のときは、時間前に教室に居て欲しい。特別の事情のない限り講義時間を守る」という要請だつた。そのあとにつづいた言葉が忘れられない。「大学は『経営』の体制である。学生に正しい『サービス』をすることは、大学の使命でもある」と。

私の都立大学時代はすでに大学紛争が始まつていた。その都立大学で学生委員長として、学生達と、安保闘争で国会闘争等に参加した経験をもつている。その耳には、このボストン大学の学長の訓示は、異様に聞こえたことはいふまでもない。

アメリカには州立大学はあつても、国立大学はない。私立大学の伝統がアメリカの自由主義社会の基礎となつている。「国立大学指導型」ともいふべき日本の大学紛争のなかで、私立大学はどのような役割を果したのかと

いう反省の念は、東欧を中心とする共産党体制の変化を見るにつけ、私の念頭を去らない『今年の社会学』あるいは『平成の社会学』の内容となるかも知れないのである。

IV 思い出のなから

私の東洋大学学長十年という、何か大学紛争の連続のように思われる。現に百年史編纂室長からの要請にもそのような書いてある。しかし、私の大学への愛情はそんなものだけではない。今でも校歌を口ずさむことを考えても、『鐘に恨は数々ござる』という歌舞伎の名セリフと同じように、『雑踏』のなかに、それなりの苦い思い出がある。

その思い出は、紛争のなかだから、人間関係が多い。学問だけの接触ではなかったから、その関係にも『波瀾万丈』という形容詞がそのままではまるようなものが多い。しかし、それを今ここに書くことには、若干のためらいを覚える。もう五年たつと、それらの『先生方』との関係も、『靈峰遠く』望むことになるから、その時に譲るとして、とりあえず身近に感じていることに触れてみる。

1 社会学研究所

私が都立大学から東洋に移った『縁』は、すでに述べたように、『三縁』——米林・千葉・矢野の三人——である。とくにその中で東京大学同期でもあった、東洋大学社会学部創設の功労者故米林富男教授、人を魅きつける

ことを本能的に身につけていような人物、米林に声をかけられると、「ノー」ということが出来ないと言われ、た程人間関係の良い人物である。日本で最初の社会学部をつくり、社会学研究所を付置し、そして応用社会学の研究機関として、テレビの実験室まで設置した。彼はまさに、大学の経営者でもあった。

そればかりではない。日本社会学会の会長は、ほとんど東洋大学から出ている。創設のときからすると、戸田貞三、林恵海、小山隆、黒川純一、福武直等々、その名声は天下に聞こえたといつてもよい。それで自分はいうと、自ら設置した社会学研究所の「所長」。実は社会学界の「人事相談所」のような役割を果していたのである。

米林教授は私を都立から呼ぶのに、やはりこの研究所を使った。都立等とちがつて大学には研究所があるから是非やって来いと。引き受けて来てみると、それは六号館の「屋根裏」の部屋で、とても研究所などというものではない。しかしそこを与えられ、とんだ拍子に学長に選ばれての大学紛争のなかでは、この研究所は役に立った。何しろ学長が「屋根裏」にいたとは、あまり知られない。学生等との難しい折衝も、こととなれば、こちらに主体性があるので、話しも抵抗が少なくて済む。「隠れ蓑」という言葉があるが、「隠れ小屋」を与えてくれた米林教授の深謀に今でも感謝している。ちなみにその長男の米林喜男も社会学部の出身で、現在（平成二年）順天堂大学の助教授、親の血を更に濃くしたように、こちらは「健康社会学」という分野を開拓して、その世界学会の日本代表のような役割をしている。彼などは、やがて出現するであろう「健康社会学」のリーダーになることは間違いないと言える。

2 「橋本聖子」との縁

この原稿を平成二年二月十二日の朝書いた。その日の朝刊はスポーツ欄で、いずれも日本を代表するスケータ―「橋本聖子」(富士急)の五〇〇米での世界選手権制覇を論じている。

私はこの「聖子」のイベントを見る度に、彼女が東洋にいたならばと、書齋に飾ってある彼女とのスナップに目をやる。私の家族は、私を除いて全員スキー、スケートをやる。それだけに当時の大学のスケート部長藤野助教授とは親しく、神宮球場への野球の応援でも、常に一緒の仲である。その藤野助教授から、当時まだ高校の一選手でしかなかった橋本を、是非洋大に入学させたいとの話、早速賛成して、北海道に橋本家を訪れた。その時の印象、それは聖子よりも父親のきびしい姿勢。この人ならば娘をチャンピオンにするだろうとのインスピレーションを受けた。それだけに熱心になり、その後の再会で、どんな条件でも受け入れたいということになった。

実はこれは藤野助教授には伝えてなかったが、中間に、学会があつて札幌に行く途中、私一人で挨拶に行ったことがある。それは父親に大学の熱意を示すことになると考えたからである。案の定お父さんは、私の誠意をくんでくれ、話しは順調に進んでいったと思われる。

しかし、「好事魔多し」のたとえ通り、せっかくのこの約束も、私が四回目の学長選挙で、その地位を去ることになる。あとで聞いたら、橋本は富士急にとの話、だんだん判つたのは話し合いの当事者が大学を去つたというのが理由らしいが、今更ながらせっかくの「縁」が切れてしまったことが残念に思われる。

大学の責任者として、一人の選手の育成に傾倒することは必ずしも妥当とはいえないという批判は覚悟のうえである。大学は、その教育と研究のなかから、「学問が育つ」ことがその目的である。しかし私立大学には、若干別のパフォーマンスがあつてよいのではなからうか。大学にスポーツが花を開くことのなかに、同じ意義を私は見出したい。

一人の選手が、一秒の何分の一という時間を目ざして競争する。世間が評価するのは結果としてのその記録であるが、その記録を達成するための「学生」の努力は、その属する大学に、どれだけの影響を与えるか計り知れないものがある。

世の中に「看板娘」とかいう言葉があるが、それは封建時代の話、現代のような「情報社会」では、一人の選手の行動でも、それは大学の「教育の成果」として映るのである。私は今でも思っている。もし橋本選手が、その背中に、胸に「東洋大」というイニシアルをつけていたら、その記録に影響があつたかどうか。すでに世界レベルのリンクで滑走している聖子であるが、彼女が、大学の学生として、その競技力の他に、学習への責任が加えられたらば、彼女の記録はどうなるかという期待である。

洋大には、有力な体育会があり、先輩も後輩の育成に努力しているが、私のような「スポーツの哲学」が、通じるものかどうか、話し合つて見たいと思うことがある。

3 神宮球場での胴上げ

野球が好きだからというのではないが、私はときどきいろいろな「ジंकス」に捕らわれる。その一つに、大学が紛争で騒いでいるときには、野球部も強い。紛争十年の間に、二回も東都大学で優勝している。去って七年、大学は、平成の年に入って益々「平静」であつて、芽出度いことだが、それと同時に野球の方は優勝から離れてしまい、神宮も第二球場となると、応援の場所もなくなつてしまふから残念である。

私の野球場でのハイライトは、学生と喜怒哀楽を同時に出来ることである。ホームランが出たときなどは、思はず応援団長のところに走つていつて共に校歌を唱える。その醍醐味は絶対である。しかし時にはエラーで敵方に点を与えたときなど、それをあとで、何度か追想しながら、あのエラーがなかつたらどのようにゲームが展開するかなど、追憶にふけて、帰りの地下鉄の降りる駅を忘れたことが何度もある。

それにしても、二回の優勝のうち、一回目には、優勝決定と共に思わず応援席からグラウンドに降りて、選手につかまり、「胴上げ」の洗礼を受けることになる。このときの嬉しさは、当時を追想すると身体が躍動する。

しかし私の野球への傾倒は、プレーそのものだけではない。優勢なゲーム展開で、応援の学生が次第に増加する、なかには紛争中のリーダーなどにも出会つて、お互いに握手をしたという「感激の場面」もある。そして校歌・応援歌の合唱、私はこの合唱のなかに、白山・川越・そして朝霞というバラバラなキャンパスが、一体となつて「学問に励む」という決意と表明が含まれていると思う。それは、それぞれのキャンパスや教室では、得ることの出来ない学習エネルギーの創出だと思ふ。

それにしても球場で会う応援団の一人に、社会学部出身の渡辺君という「酒屋さん」がいる。同じ学問をした

ということもあって、十年來の知己、彼がいないと応援にきた気分にならないくらい仲。服装が「酒屋」そのものの前掛姿が、それが「異様」に映らないで、応援にとけこんでいる。まさか店舗のPRのためとは思わないが、さすがマスコミを勉強しただけの「実践社会学」と感服することもある。

野球部の出身者がプロに入る。松沼（西武）仁村（中日）等は両親も知っているので、プロ野球の方まで、人間関係がつづくとなると、社会学の理論も、少し偏向してくるのではないかと反省することもある。

それにしても、神宮球場は私にとって最高の場所、多年の「通勤」のためか、入口の職員が顔見知りとなる。パスなど見せる必要がない。大学が勝っているときには、そのスコアまで入口で教えてくれる。応援団の一人が、「神宮の学長」と呼んでくれたことがある。これだけはつづけて行くつもりである。

V 「桐の木は残った」

1 大学のシンボルは

この言葉に似た「樅の木は残った」というNHKのテレビ・大河ドラマがあった。その木は仙台に近い所の物語りである。偶然そのあと朝のドラマに「はね駒」というのがあった。実はこの主人公となった明治時代の女性は、私の実の母、生れも樅の木の残ったところに近い。この母四十歳早々にこの世を去り、私に残したのは、その著書一部に「桐の花」の好きだったことの記述である。

たまたま大学の学長室からは窓越しに、桐の木が一本見える。殺ばつな大学紛争がつづいたなかでも、時がくれば、必ず可憐な紫色の花を開く。それを見る度に、遠い昔逝くなつた母を思い出す。そして桐の花はいつのまにか私の東洋のシンボルとなる。

正門といつても、高等学校の校庭を通つての門である。その近くには桜の木が毎年美しい姿を見せてくれる。それを背景にした校舎の景観は、まさに大学が「哲学館」という名をもっていた時代をしのばせるものがある。

しかし桐の木は、正門ではない通用門を、上りつめようとする左側の狭い所に、今日では太くなりつつ成長をつづけている。私にとっては、この桐の木は大学のシンボルであり精神だとさえ思っている。おそらくこの木は大学が紛争のルツボに置かれ、東大の安田講堂と同じように、外部からの放水で、集まった学生がスプぬれになつた光景も見ているにちがいない。

その中庭で、私が講義中から連れ出され、階段をころぶように降りて、十時間余、意識がもうろうとなつて運ばれたことも、桐の木は見ていたにちがいない。

学長には、一応秘書という女性がつくが、十年の間には何人か変つてゐる。桐の花が咲く頃になると、「今日も校庭の桐が花を開きました」と葉書一枚で知らせてくれる。私は東洋大学がつづく限り、この木は残して欲しいと心から願う。

2 発祥の地 “白山”

私が大学を去るに当たって、「遺言」ともいふべき引継の言葉を残していることはすでに触れた。その焦点となるのは「ふるさとを忘れるな」という一言につきる。

元いた都立大学は、一九九四年には、八王子に全学移転する。たまたま知事から、その善後措置について意見を問われ、私は「全学」の移転には賛成しなかった。「ふるさと創生」などという言葉が語られるなかで、「ふるさと喪失」するなどは、まちづくりの根本精神にも反すると考える。

この点からすると、東洋大学は、すでにそのキャンパスを、川越・朝霞と分けている。しかし川越の場合は工学部、朝霞は教養部の立地である。私学では学祖が選んだ建学の地を離れることは、間違いだと考える。

以上のような観点から、私の在職中には、随分いろいろな候補地が語られたが、私は優柔不断とみられたくらい、そのいずれにも積極的でなかったことを告白する。私には、いつも「白雲なびく」とはゆかないが、校歌が「白山台」から「霊峰富士」を望み、学祖井上円了先生が、そこに「アジアの魂としての哲学の基礎」をすえられた伝統は守らなければならない。

この点は、大学移転についての、国公立のものと同立大学の理論的なちがいででもある。私はときどき夢を見る。それは白山の丘に、巨大な白亜の校舎が出来て、その「講堂」で別れを告げる光景である。

なぜこのような夢を見るかというと、私の退職が、その年の九月上旬、丁度大学は夏季休暇の真つ最中、学園には事務局の人の姿も見えない時である。

学長になっても、社会学研究所の部屋には私の椅子もあり、参考書も置いてある。大学紛争の最中も、この部

屋を守ってくれた助手の山崎美知子と、本を片付けて通用門に向った。見送ってくれたのは、「愛する桐の木」、その麓には、タテ看の破れたのが置いてあった。ハッキリ印象に残っている。

学生の中にいることが何よりの好きな私が、そのキャンパスとの別れを、このような「孤独の姿」で迎えようとは思わなかった。それが夢に残る。しかしこの夢は現実となって、その年の卒業式に「来賓」として招かれ末席に居た。学長達が退席した最後に私は、卒業生の真ん中を通して会場を去った。そのときの学生の拍手に、私は涙をこらえることが出来なかった。

白山を離れて東洋大学はない。いかなる努力をしても、東洋・白山・井上・哲学というイメージは、東洋大学の生命である。

幸い私のこのような「妄想」は、維持されるようであるが、白山・朝霞・川越という路線も、そこに大学が多年にわたって培ってきた学問の畑の広がっていることを忘れてはならないであろう。

3 学祖井上先生の墓碑

大学紛争の中の最大の痛恨事は、中央の元図書館の前庭にあった学祖井上先生の胸像が姿を消したことである。その当時は同じ私立大学の早稲田の校庭にある大隈重信の「銅像」に汚物がかけられたというのでマスコミを賑わしていた。この場合は、たとえ「汚された」にしても「銅像の独立」は侵されたわけではない。幸いわが大学では、一時どこかに隠されたらしい。それでも、紛争のなかで、この「胸像神隠し事件」ほど胸を痛めたものは

ない。

紛争のなかでは、学長室などに、学生が侵入して器物を破壊する行為はしばしば見受けられた。しかしある時その損傷が余りにもひどかったので、どのようなグループかと調べてみたところ、それは近接する東京大学のセクトからの応援部隊によるものであることが判った。

先には、顔見知りの学生は、何等かのセクトに属していても、必ずしも「暴力」を振るわないことを書いたが、同じように、自分の大学の学生は、たとえ理論的な対立があつたとしても、器物の破壊にも、やはりどこかの校歌にもあるように「わが愛する母校」という認識が現われていることが判るのである。

しかし、どここの大学でも、キャンパスを離れて、学祖等の「墓碑」を損傷したということは聞かない。しかし国を挙げて一時「文化大革命」という政策を推進した中国では、革命の精神に反する物は、すべて破壊するといふ暴挙に出た。

学祖井上先生は、いうまでもなく中国の大連市で死去され、その墓碑は現地に造られてあつた。文化大革命の波は、たとえ異国の学者であつても、資本主義体制下の学者はすべて抹殺すべきであるとして、大連湾を望む丘の中腹に建てられた墓碑は、ブルドーザーによって近くの海中に、投棄されたのである。私はこの事実を、退職後知った。

4 学祖の墓碑の再建

大学を去つてからであるが、北九州市が大連市と姉妹都市であり、毎年「青年の船」を仕立てて、大連を訪れている。たまたま当時の谷北九州市長は私の親友、たつて青年の船の指導員を志願して便乗、現地を詳しく調査した。その報告は、大学に提出してある。

山腹は、荘麗な本願寺の建物とともに、「東洋の哲学者の碑」として大連の名物であつたものが、無慙にも姿を消し、その跡には、公共住宅がつくられていた。案内してくれた市政府の副市長は、文化大革命の「仕業」であり、遺憾の意を述べたが、青年の船の短い滞在期間にそれ以上のことは何も出来ないままに大学に報告した。

しかし、私は紛争時の学祖の胸像事件を思い浮かべ、できれば何とか再建の途はと考えていた。たまたま北九州市の現末吉興一市長がこれまた友人であり、その市が中心になり、アメリカのペンシルバニア大学と共同で「国際東アジア研究所」をつくることになる。

縁は奇なもの味なものなど洒落るつもりはないが、ペン大の前学長で現在は名誉学長であるマルチン・マヤソン教授——この教授はアメリカの大学紛争の中で「最も成功した学長」として知られている。私などは「最も苦勞した学長」と言われてもよいのではないかと思うが——と三十年來の友人であり、日本側の中心となつて研究所を助け、その研究プログラムの一つである「特別都市大連の都市計画」を担当することになり、近々大連市を訪問することとなっている。前回訪問したこともあるので、正式に墓碑再建を申し入れたいと思つた。しかし学祖の墓碑となると大学と無関係には出来ない。去る二月一日大学で神作学長に会い、具体的な方法は、先方との話し合いが成立したうえで協議することになった。

大学紛争のなかで起こった学祖の胸像が新しい白山キャンパスで、どのように生かされるかは私は知らない。しかし一世紀も前から学祖が、海外まで、その哲理思想の普及に努力され、異国の土に骨を埋められたその再建に若干の手伝いをする事が出来るであろうことに限りない喜びをもっている。

しかも、私が現在「所長」の責任をもつ「国際東アジア研究所」には、「大連都市再建」のプログラムがある。東洋出身の奥田道大教授（立教大学）と洋大の工学部の内田雄造建築学科助教授を兼任研究員として参加して貰うことに決めている。母校関係者が少しでも参加して欲しいからである。

5 “もやいの碑”の建設

何かこの記録が、最後になって「碑」の問題に集中するようだが、何も特別の意図をもったのではない。少なくとも私の生涯にとつては、大学紛争の時代はもつとも真剣な時代であった。そのとどのつまりの結着として、ここに、「もやいの碑」の伝説を語らしてもらおう。

これまた洋大での社会学の教室の縁から出発する。前項にあげた奥田道大教授と同期というから、社会学出身でも古い方である。その名は松島如水君。たまたま僧職にあつて、一寺を宰領する身分。その檀徒の子供が太平洋戦争の東京空襲によつて死亡する。その冥福を祈念するために、東京の巢鴨に「平和霊苑」を建立した。三人の子供の慰霊のための記念碑となるのである。たまたまその除幕式のときに話しを頼まれた。そして「社会学」を勉強した者はすべて「有縁」であつて、仏教のいふような「無縁」、それにつながる「無縁仏」などはありません。

ないと強調した。

それには、私が東京都の民生局長だったときの体験がある。太平洋戦争が終わって数年、東京は連合軍の支配下に置かれ、すべての行政はその指示によって行われた。とくに社会福祉のことなどは、直接占領軍が指揮することが多かった。

それは忘れもしない昭和二十五年の梅雨の日曜日、司令部からの直接の電話で、瀕死の女性が倒れているからすぐ救助せよとの命令である。とるものもとりあえず、タクシーを走らせて指示された現場——それは当時の浅草公園の片隅、捨てられたゴミがうず高くつもっていた——に着いた。明らかに年とった女性、言葉をかけても応答がない。肩に触ると言葉の代りに、歌が聞こえてきた。それは戦争中に、若者達を戦場に送るときに唱われた。勝ってくるぞと勇ましく……、細雨のなかのこの歌声、このときほど戦争の責任を感じたことはない。

何度言葉をかけても応答はない。タクシーの運転手と、抱えて自動車に乗せようと身体に触ると再び歌声、とりあえず近くの病院に連れて行ったが、戦後のこと、簡単に入院させてくれない。やむを得ず、雨の中を都立の精神病院に入れた。

そして約一年、それはやはり雨の日だったから、よく覚えている。病院からの連絡があつて、あなたの名で入院した老人は亡くなった”という知らせ。何としても縁があつてのこと。死体は安置所に置かれてあつたが、誰が上げたか、たつた一本の線香が紫の煙をあげている。そのときの光景が今でも目に浮かぶ。

係の人にどこに葬るのかと聞くと、無縁”ですから、無縁墓地”にでもという答え。私はこのとき程名前も判

らずに死んだ人間の扱ひの冷たさを覚えたことはない。

もし意識があれば、誰かの名が語られ、死後の措置も「有縁」として扱われるのではないか。誰が無縁にしたかと追及すれば、それはこの女性の手から、息子を奪った「戦争」ではないか。そして人間としての語る言葉は、「勝つてくるぞ」ということになる。

私はこのとき「断固」として人間を「無縁」として扱うことに反対する決意をした。そして、松島君達と語り合つて、作つたのが、「もやいの碑」。「もやい」とは集まるという意味である。

たまたま、その場所が、巢鴨のJR駅の近く、高齢者のよく集まる「とげぬき地蔵」の反対側である。この地蔵にも縁があつて、東洋大学の社会学部がいとむ「児童相談所」が長く置かれたのである。何も来世の「もやい」だから、高齢者の集まるところを選んだわけではない。

このことを現学長の神作先生に話したら、共鳴され、やはり近くにある聖学院大学の学長と共に、除幕式に列席された。私の東洋大学につながる縁が、このように宗教・宗派をこえて「来世」まで「もやう」ことに、限らない喜びを覚えるものである。

VI 私「名誉校友」

最後に一言付け加えさせて欲しい。それは私は、東洋大学にとって「他人」ではなく、歴とした「校友」なのである。学長などという一応聞こえはいいが、紛争中のそれは、決して格好よいものではなかった。紛争の記

事が新聞等に出ると、必ず「学長名」が出てくる。私立大学では、学校を經營しているのは理事長であるが、これも「国公立並み」に、学長の名前がある。

大学紛争中は、学生が自宅を訪れることもあつて、隣り近所から、まさか「火炎ピンは」等と聞かれて、家族が応答に困ったことさえある。

校友会か同窓会か判らないが、退職後、送られてきたのが、名誉校友の称号。但しこの称号は、東京よりも地方で役に立つ。時々地方に講演に行くと、必ずといってよい程、校友が名刺をくれる。そして古い時代の話しに加えて大学の近況などを聞かれる。だから大学のことには、かなり注意を払っている。是非一般の校友並みに扱って欲しい。

東北が生んだ詩人、石川啄木は、「ふるさと」恋しさの余り、次のような歌を残している。

「ふる里の なまり懐し 停車場の

人込のなかに そをききに行く」

私ならこう唱う、

「ふるさとの 母校懐し 球場の

バットの音に そをききに行く」

(東洋大学名誉教授)